

インド後期密教における葬儀と追善

桜井宗信

一、はじめに

この冊子を手に取られる本派の教師の皆さんにとって、葬儀の執行は最も重要な檀務の一つであります。日頃檀家さんと親密な御縁を結んでおられる諸大徳方ですから、そのお付き合いを踏まえ、参列者がみな故人の業績と人柄とを偲びながらお大師様の教えに触れることが出来る、意義深い一時となさっていることでしょう。

私は（桜井）は一昨年、松長有慶先生（現高野山真言宗管長）の御厚意により『悪趣浄化（ドゥルガティ・パリシヨーダナ）タントラ』と『ナーマサンギーティ』というインド後期密教界で重用された二經典の概略を紹介する機会に恵まれました。このうち『悪趣浄化タントラ』はその名から推測されますように、死んで悪趣に墮ちて苦しむ衆生を救済することを主題としていますので、密教行者が死者とどのように向き合ったのかが、葬儀や追善供養に当たる儀式の方法も含めて述べられています。これを一つの機会として、今一つの經典『ナーマサンギーティ』に関連する葬送儀式も併せて、インド後期密教における死者儀礼に関する考究を進めておりますが、以下

本稿では、その結果明らかになつた事柄の幾つかを紹介致します。これを通じて、古のインド密教世界における死者儀礼について知つて頂き、現代の葬儀事情を振り返つてみる便よすがにして頂ければ幸いです。

二、葬儀は利他行

葬儀は何のために行うのか。寺院を維持するための布施との関わりはさて置き、皆さまはこの問い合わせにお答えになられるでしょうか。

おおよそ十一世紀に活躍していたスムリティジュニヤーナキールティ（以下スムリティと略）という密教学僧は、これに対する「葬儀は利他を目的として行う」と明確に言い切っています。言うまでもなく修行は、行者自身が覺りを目指して行う自利行と他者の覺りに資することを目的とした利他行とに分けられますが、今生でどのような境遇にあつて如何なる生涯を送つた者であつても、後生では覺りに向かう道筋を歩んで行けるように導こうとする過程（儀式）が葬儀であるとされますから、その限りにおいて確かにこれは「利他行」と言えましょう。そしてこれは、死者を灌頂して仏縁を結ばせ、密厳国土での行道へと導く、私達の「引導作法」の考え方と基本的に一致しています。

スムリティは更に、葬儀は「死体にまだ暖かみが残つている間に」始める必要があると言つていますが、これは葬儀を司る行者が、死後間を置かずに駆けつけることの出来る状況にあるべきことを意味しています。そこから予想されるのは、普段から顔馴染みで互いに信頼と尊敬とを寄せ合う行者と信徒の姿であり、行者には信徒との間にそれだけ親しい関係を築くことが期待されていたとも考えられます。輪廻転生が自明のものと受け取られていた当時、死後の苦しみを除き仏との強固な縁をそのまま来世に引き継いでくれるという行者の行為は、何よ

りも頼もしく有り難いものと人々に受け取られた筈です。

三、葬儀は過去世の功德

生前仏教に帰依し行者に信頼を寄せていた信徒が、死に際して葬儀の執行を受け善趣での修行に進むという場合には、仏縁を結んだという善業が更なる仏道への邁進という好ましい果報を生み出したと考えられますので、自業自得とか因果応報と言われる基本的な思想と矛盾することは有りません。しかし、葬儀が「利他行」であるからには、二利円満を目標とする行者は、たとえ死者の生前の行いがどのようにであれ、或いは生前の生き様を全く知らなくても葬儀を進めて悪趣からの救済を図らなければなりません。もしその死者が悪業ばかりで仏縁のかげらもなかつたならば、どうでしょうか。それでも葬儀の功德で救済されるというのは自業自得の原則に反していることにならないでしょうか。

この疑問に答えるようなお話が、先に触れた『悪趣浄化タントラ』の中に出ていますので紹介してみましょう。

ご存知とは思いますが、仏教經典には多くの場合、教主世尊がその經典をお説きになることになつた発端、或いは因縁話が含まれています。この經典の場合、帝釈天が自分の知己で亡くなつたばかりのヴィマラマニプラバという名の神を心配して、彼がどのような境遇に再生したのかを釈尊に尋ねたことから話が始まります。釈尊によれば、その神は無間地獄に墮ちて一万二千年間恐ろしい責め苦を受けてから、更に他の地獄や畜生・餓鬼界に生まれて苦しみ続け、人間界に戻つた後も不幸な境遇に陥つたままであり、そしてそれがもとで更なる罪を犯し苦悩を背負い続ける、とのこと。恐れおののいた帝釈天は、当のヴィマラマニプラバが、ひいては悪趣に苦しむ全ての者達が苦悩の連続から逃れる術を説いて下さるよう世尊に懇願し、それに対し示されたのが『悪趣浄化

タントラ』である、というのです。

さて、このヴィマラマニプラバは、世尊の教えに従つて帝釈天達が執り行つた儀式の御蔭で悪趣での苦しみから解放されたのですが、經典には、彼が帝釈天達を通じた救済に与ることが出来たのは、過去世において釈尊や帝釈天と縁を結んでいて、それなりの善業を積んでいたからだと述べられています。これを更に広く解釈すると、死者は葬儀を営んでもらえる限り、行者を葬儀に向かわせるだけの功徳が彼には備わっていたのだ、ということになります。

逆に、死者を前にした行者は、故人の来し方を詮索したりあれこれ言挙げしたりせず、自らが葬儀を出せるのも故人が昔積んだ善業の功徳であると、敬意をもつて式の執行に当たらなければならないということかも知れません。

四、複数日を費やす儀式

現代日本での葬儀は、逮夜（お通夜）を含めて通常足かけ二日間で行われますが、「ナーマサンギーテイ」文殊具密流に従う或る儀軌では七日間を最短とし、更に二日間か四日間延長する場合もあることを述べています。「資財の乏しい者達は葬儀一切を七日間で完遂すべきだ」との記述がありますので、施主の財力に応じて期間の増減が行われたと考えられます。一方でこの期間の长短は、次に紹介する「曼荼羅の瞑想と供養」（左記の④）をどのくらい繰り返すかに係つていますので、儀式を主宰する行者の時間的余裕で使い分けられた可能性もあります。

続いてその葬儀の大まかな流れを見てみましょう。先ず主な項目を時系列に沿つて並べると左のようになります。

- ①遺体を悪鬼などから防護し、浄化する
 - ②死者の意識を呼び戻し、遺体に入れる
 - ③曼荼羅を築き、そこに遺体を安置する
 - ④曼荼羅諸尊を瞑想し、一種の入我我入觀や供養を修する
 - ⑤火炉を穿ち、そこで遺体を荼毘に付す
 - ⑥死者を善趣（仏道）へ導く
 - ⑦遺骨や遺灰で仏塔を造り供養する
- ①及び②は準備段階に相当し、これで最初の一日前が終わります。第二日目に③と④を続けて行いますが、この④を何日間行うかで葬儀全体に費やされる日数が変わることになります。最短の場合は三日間で、以下五日間の場合、七日間の場合があるとされます。③の曼荼羅は土壇に極彩色の砂を使って描いた、いわゆる砂絵曼荼羅であり、その中央が荼毘に付されるまでの遺体の安置場所となります。そして葬儀の最終日に行われるのが残り三項目であり、言わば葬儀の中心となる部分です。節を替えて少し詳しく紹介したいと思います。

五、護摩としての荼毘

現代日本の葬儀を考えますと、火葬場で行われる荼毘そのものは儀式全体の中でもそれほど重要な位置を占めているわけではなく、私達僧侶が関わる儀式的なお勤めも、地方によって多少の違いはあるかも知れませんが、光明真言の読誦など極く限られたものです。しかしながら印度密教で伝える荼毘は、葬儀を司る行者が主体的に関わるもので、重要な意義を担わされています。それは、荼毘が護摩の一種として理解され実践されるということです。

行者は曼荼羅の中心宮殿と同一視される火炉を穿ち、その場へ火天をお招きして護摩による供養を行うとともに、自らが火天と一体となり遺体もその火炉で燃やします。

先にも触れたスムリティは遺体を荼毘に付す際に「遺体を供養対象として燃やすこと、遺体そのものとして燃やすこと、護摩の供物として燃やすこと」という三種類の理解が必要であると述べています。遺体そのものとして燃やしてその浄化を行うだけでなく、護摩供を捧げて死者を供養することも必要であり、その一方で遺体はまた供物として火炉で燃やされ諸尊に奉獻される存在でもあるということです。

更に、「ナーマサンギーティ」流儀の或る儀軌では、死者自身が火天と合一して自ら遺体を焼却し浄化する、という趣旨が述べられています。「死者自身」とはいつても、実際はそのように行者が観想することを意味しているのですが、宗教上の信念から見ますと、死者の意識は行者によつてその場に呼び寄せられ、行者が修する觀法を介して火天と一体となつてゐるとされます。従つてそれをそのまま承認するならば、荼毘は死者が護摩によつて自らを浄化する儀式であることになります。

六、死者は密教行者

前節（五）では、行者の觀念中で死者自身が火天と合一すると言いましたが、生身の人間であれば、このような觀法を行えるのは伝法灌頂を授かった“阿闍梨”でなければならない筈です。実のところこの原則は今の場合にも当て嵌まつております、行者は荼毘の前に「ナーマサンギーティ」文殊具密流儀が伝える全ての灌頂を死者に授けておりますので、死者は言わば一人前の密教行者として修法も可能な状態になつたと考えられます。

もつとも、死者に灌頂を授けるのは今話題にしている「火天との合一」を可能にすることだけが目的なのでは

ありません。この修法を説かない儀軌もあり、あくまで、死後の世界において死者が行者として修行に勤め仏道を邁進するよう導くことが眼目です。

灌頂を授けるタイミングは、儀軌によつて荼毘の前であつたり後であつたりと一定していませんが、このあと密教行者（今の場合は文殊具密流者）として行法を深め仏果を目指すよう期待される点では変わり有りません。或る儀軌によれば、死者は葬儀の最後に行者から次のように呼びかけられ、新たな修行者の一人として送り出されます。

行け、行け、良家の息子よ。資糧道・加行道・見道・修道・菩提無間道というこれらの仏道を進んで覺りを得よ（取意）

また或る儀軌は、死者に一切皆空を体得する觀法、及び“五蘊即仏・煩惱即仏智・輪廻の勝義無”といつた真理を説き示し、併せて「無上大菩提を得よかし」と督励しています。

一方で、同じ『ナーマサンギーテイ』を所依とする流儀でも、八世紀中頃に活躍したマンジュシュリーミトラが興した小文殊虚空無垢流では、死者は葬儀を通じて仏にまで高められ色究竟天に安住すると説いています。但しこの場合も行者が死者に施すのは灌頂までであり、死者が色究竟天に到るのは、荼毘によつて浄化され「大毘盧遮那の智慧の光明」が導くことによるところとされていますので、葬儀を司る行者自身の力によつて成仏昇天が果たされるわけではありません。

七、来世の生活もしつかり保障

私達は葬儀以外にも、死者の得脱を願つて忌日や年忌を期した供養や廻向——括して追善供養と呼べるもの——を行いますが、インド密教世界ではどうでしょうか。忌日も年忌も、多分に中国や我が国の信仰・習俗を承けて出来上がったものといわれますから、これらと全く同じ形式の考え方や儀式はインド密教文献には見当たりません。しかし、忌日や年忌の觀念が無いとは言いましても、死者の利益を意図した行法は葬儀以外にも幾つか実践されていたようです。

先ず先の四で触れましたように、文殊具密流の葬儀では荼毘後に残った遺骨や遺灰で小仏塔を作るという作法を説いていますが、例えはそれを御本尊として法要を営むといった造塔後の作法には全く触れておりません。恐らく仏塔を作ること自体が功德を生む善業であり、死者に代わつてその善業を積む、すなわち死者に功德を廻向することが意図されているのでしよう。また『悪趣浄化タントラ』には、小さな仏塔を作つてその中に死者の名前を書いた紙と陀羅尼を書いた紙を封入して供養する、という供養法が述べられています。ここで使われる「陀羅尼」は「一切悪趣浄化王の陀羅尼」というもので、「死者を悪趣から救済する威力を有する」と『悪趣浄化タントラ』で言われています。

一方『悪趣浄化タントラ』には他に、悪趣での苦しみを免れ善趣に再生した死者が、その世界で安楽な生活が送れるように、言わば“来世利益”を図る修法も説かれています。折角善趣に転生してもそこで悲惨な境遇に陥れば、それが悪業を犯す引き金となつて再び悪趣への道に逆戻りしかねません。単に次の世での安樂（或いは実り多い修行）だけでなく、その次の境涯をも見据えた、言わば息の長いアフターケアが考えられています。

同タントラが説いていいる修法は護摩法であり、四種法のうち息災法以外の三法に、善趣に転生した者が得る利益を次のように対応させています。

増益護摩 転生者に引き続き安樂が齋される

敬愛護摩 転生者が神々等を意のままに従わせる

降伏護摩 転生者を害する魔物等を駆逐する

文殊具密流の儀軌にも同じ内容の護摩が説かれていますので、死者の後生安樂を願う修法として代表的なものであつたかも知れません。

八、終わりに

以上、私（桜井）が専門としているインド後期密教の世界から、葬儀や追善に関わるトピックを幾つか述べてみました。これをもって「葬儀はインド以来の伝統として密教僧が関わる最も重要な任務である」などと強弁するつもりは全くありませんし、社会状況や信心の在り方など多くの点で異なる現代に向けて、ここから単純に何らかの意義や方策を引き出そうとも思いません。

ただ、真摯に死者の後生安樂を願つて葬儀を執行し修法に勤める行者の在りよう、そしてその背後に置かれている「葬儀を利他行であるとする搖るぎない信念」との二点は、私達が宗教者の一人として死者と向き合い弔おうとする時に、時代や社会情勢とは関係無く心に留めておくことが出来るように思われます。

〈参考文献〉

Davidson, R. M. *The Litany of Names of Mañjuśri, TANTRIC AND TAOIST STUDIES*, 1981

SKORUPSKI, Tadeusz *THE SARVADURGATIPARIŚODHANA TANTRA*, Delhi, 1983.

桜井宗信 「ナーマサンギーテイ」 読経から瞑想へ、『ドウルガテイパリシモーダナ・タントラ』死者の救済と後生安樂を目指して、松長有慶編著『インド後期密教』(上)、春秋社、平成十七年十一月、一一五—一六〇頁

同 Manjuśrīmitraの説く死者儀礼、『密教学研究』第31+32号、平成十八年三月、一一一四頁(横書)

同 文殊具密流の伝える死者儀礼、『真言密教と日本文化』(下)、ノンブル、平成十九年十二月、一五九—一八一頁(横組)